

ナサニエル・ホーソーンの英国体験

——コヴェントリー訪問の一解釈——

野 呂 浩*

I

ハーマン・メルヴィルは、“Hawthorne and His Moses”の中で、ナサニエル・ホーソーンを科学的なアプローチのみで理解しようとしても捉えきれず、心で解釈してこそ真髓を垣間見ることが出来ると述べている。顕微鏡で覗き、視覚で追い掛けても何も見えず、当然、輪を掛けることなど論外であり、触れば超一流の価値を見いだすであろうと主張しているのである¹⁾。また、ナサニエル・ホーソーンの長男、ジュリアン・ホーソーンも、両親の伝記に、父のような人間の本質は絶対に分からない。それを突き止めようと解剖しても何一つ発見できないのであるとの一文を残している。更に、その説明として、父のような人物の正体を多少なりとも判断可能な人間は、自分の内に謎めいた何かを持ち合わせ、自分の手でその世界のヴェールを剥がそうと絶えず、執拗に努力し続ける、父と似たような者のみであろう。父の存在の核となる部分は具体的な形で表現されていないのだとも付け加えているのである²⁾。

メルヴィルは、主にナサニエル・ホーソーンの文学作品に秘められた深遠な世界を知るに必要不可欠な、読者の側の、基本的な読みの視座を指摘しており、息子のジュリアンは、人間的側面を告白している。しかし、両者の見解は、ナサニエル・ホーソーンの文学作品と人間ナサニエル・ホーソーンの両方に共通する特徴とも受けとめられよう。作家の人間性、価値観、世界観等と何ら関わりのない文学作品を探すのも困難であれば、文学世界とまったく繋がらない作家も考えられないか

らである。メルヴィルは、人間の深層心理等をも踏まえて読まなければ、人間の内面世界を作品化したナサニエル・ホーソーンの世界に近づくことの難しさを熟知しているのである。一方、息子なのだから、父親の実像は手にとるように分かるのではないかとの期待を見事に裏切るようなジュリアンの言葉ではあるが、父ナサニエル・ホーソーンの死後、妻ソファイアをはじめ、家族の皆が父の名誉を守るために大変気を遣ったこと、それに、ジュリアンがメルヴィルから、父には誰も知らない秘密があったなどと父の死後言われたことなどを考慮するならば、誰にも父の本当の姿に触れさせたくない、父親を守ろうとする息子の文章とも読めるだろう。

メルヴィルとジュリアンの言葉の深層を更に覗きたい気もするが、ナサニエル・ホーソーンと切り離すことなど到底無理な二人の言葉を基本的に尊重しつつも、筆者は敢えて、ナサニエル・ホーソーンの本当の姿に迫る試みに挑戦したいのである。作家や作品世界を学問的に研究することなどは、本質を見いだすことが出来ない頭脳的アプローチに終わる危険な作業であると、メルヴィルに諫められるようではあるが、今回は、人間ナサニエル・ホーソーンと彼の文学作品の世界も一つの有機体と捉え、ある部分を全体との関わりで分析すると、同時に全体の特徴も浮かび上がり、そうした結論が幾分ナサニエル・ホーソーンの心の琴線に触れるものであることを期待する。

さて、今回取り上げる対象は、ナサニエル・ホーソーンの英国日記である。彼のその日記は、30万語にもおよぶもので、英国についてこれほどの量を書き残した米国の作家は他にはいない。ナサニエル・ホーソーン自身が、この日記について、

* 本学基礎・教養、助教授
1994年9月5日受理

あまりにも素直に本音を書きすぎたと語っている程なので、ホーソーンの実像を探るには格好の分析対象である。

前回までの、ナサニエル・ホーソーンの英国観の検討で、好きになれないリバプールでの領事職、米国の生れ故郷セイラムを思わせるレミントンでの休暇、詩人リー・ハントとの出会い、先祖解明の並々ならぬ努力、英国階級社会、産業社会の諸問題の認識、米国の民主主義社会との比較、文学等のホーソーンなりの受けとめ方を纏めた。

今回の研究では、ホーソーンの英国体験を論じた“Hawthorne in England”を著した、ランダル・スチュアート³⁾や *Nathaniel Hawthorne The English Experience 1854-1864* を書き上げたレイモナ・ハルなども特に重要視して分析の対象としていない「コヴェントリー訪問」を詳細に検討することにする。最初から明確な目的意識もなく、ふらりと出掛けたようなコヴェントリーでの体験と体験記の中にこそ、案外その人物の虚像でなく、赤裸々な実像が見えることがあるからである。

II

ナサニエル・ホーソーンは、1857年までに2回コヴェントリーを訪問している。第一回目は、1855年7月1日の日記に記録されている。1日は日曜日であり、金曜日に汽車で出掛けたと書かれてあるので、1855年6月29日のことである。2度目のことは、1857年10月10日の日記に、土曜日にコヴェントリーに行ったと述べている。ところが、10日の記録には曜日が記載されていないので、訪問日を特定するのは難しい。次の日記の日付が10月29日で火曜日と明記してあるので、その日から逆算すると、日記をつけた10月10日が土曜日にもなるが、先週の水曜日にリバプールから戻ったとの記述から書き出していることなどから考えると、1週間前の9月29日と判断して間違いはなからう。

最初の訪問は10歳程の長男ジュリアンと一緒にであり、再度の訪問の際は、妻ソファイアを伴ってのコヴェントリー体験である。妻と子供たちの

休養を主な目的としてレミントンに来ており、そこから近い距離にあるコヴェントリーだけでなく、シェイクスピアの生誕地ストラットフォード、ウォリック、ケニルワースなどにもたびたび妻や子供たちと散歩に行ったようである。従って、コヴェントリーを訪ねたのも、特別な目的もなく、普段の小さな散歩の延長であり、日記によく使用される言い回し“without any definite object”とか、“aimless wanderings”などからも納得できる。レミントンからコヴェントリーまでは、汽車で30分程度、距離にして10マイル程である。

綿密な計画を立てて来たわけでもない割には、2回の日記の中身は濃いものである。レミントンからの出発時間、天気、汽車から眺めた町の様子、コヴェントリーの街、住宅の特徴、賑やかな市場、慈善病院、学校、Saint Mary's Hall, Saint John's Church, Trinity Church, 更には、英国の歴史、文化等に関する反応なども織り混ぜながら、誠に細やかに描写されている。

2度の記録に繰り返し用いられる重要な語の一つに、“peep”がある。強い好奇心を以て対象を注意深く見つめ、しかも、そうした凝視がなされている対象はその凝視に気付いていないことを前提として成立する行為である。ナサニエル・ホーソーンの小説には、観察を好む人物がよく登場するが、コヴェントリーでのホーソーンは一人の観察者としてすべてを眺めていることは事実である。英文学への傾倒のみならず、自分の先祖が英国から米国に渡ってきたこともあり、英国を自分の目で見るとは、ホーソーンの長年の夢でもあったのである⁴⁾。そして、19世紀の多くのアメリカ人がそうであったように、英国を含むヨーロッパを一度は訪れたい願いをホーソーンも抱いていたことは、英国をわが懐かしの故郷と呼び、英国だけでなくイタリアにも長期間滞在したことからも証明できよう。

注視した一つ一つの経験を絵画を描くごとく、注意深く描いたコヴェントリーの記録を読むと、そのようなナサニエル・ホーソーンが観察者として細部にいたるまで覗き、それを言葉で記録しな

いではいられない執念、作家気質のようなものと、彼の視覚で捉えた対象の彼なりのイメージを言葉で記録した精密な画像であることが分かる。

III

ナサニエル・ホーソーンが見つめたものを書き留めている中に、“antiquity”という語もかなりの頻度で使われている。彼が目を向けているものが、エリザベス朝時代の特徴を色濃く残すものや、悠久の歴史を刻むかのようなゴシック建築などであるので、そのような言葉が何度使用されても不思議ではない。ただ、その言葉が、眺めている対象の歴史の長さを物語るだけでなく、古えに惹かれている観察者の内面をも映しだしてくれる。常日頃から、歴史の浅い米国の物足りなさを不満に思っていたホーソーンが英国の「古え」の魅力の虜になっている様子が伝わってくるようである。それでも、冷静さを失わない観察者ナサニエル・ホーソーンに、そのような古いものにばかり囲まれた環境に生きると、人間も伝統的な生き方から抜けきれなくなるとか、新しいといってもその内実は相も変わらぬ古さばかりであるとか、外面からはとても想像できないが内側は黴臭いなどと古い文化の問題点も見抜いているような文章も散見される⁵⁾。

ホーソーンは英国滞在中、何度も「昔、そこにいたことがある。」という彼独特の感情を経験する。200年ほどの年月を経て戻ってきた先祖のようであり、自分が以前住んでいた所の様子が何もかも変わっていない奇妙な感じに囚われるのであった⁶⁾。このような一種の帰郷感情が古えに惹かれるものと混じるのである。コヴェントリーの市場の賑やかさ、市場に集まる人々、そうした場所を照らす強い日差しなどの微妙な影響も手伝ってか、ナサニエル・ホーソーンは米国のボストンや生れ故郷のセイラムを連想するのであった。

このような内面の感情は、ナサニエル・ホーソーンの初代の先祖ウィリアム・ホーソーンが、マサチューセッツ湾植民地初代総督ジョン・ウインスロップと共に、英国から渡って来た歴史を知っている故の自然な感情と片付けたくもなるが、ナ

サニエル・ホーソーンは先祖の国を単に懐しむ人物でもなければ、長い歴史の痕跡を留める古えに心を奪われるだけの珍しい一介の旅行者でもないのである。確かにそのような面がまったく無いと断言すると誤読になるだろうがナサニエル・ホーソーンの本質は本人が意識しようがしまいが、あくまでも、芸術家、作家なのである。普段見慣れた部屋の床等は、現実と想像が絡り合い、日常世界から解き放され、自由が許される中立地帯化する可能性を唱えるロマンス作家なのである。将に、現実的には彼がコヴェントリーの街にいてコヴェントリーを自分の目で見ているのだが、もう一つの目では現実には見えない米国のセイラム、ボストンを眺めているのである。現在の英国に身を置きながらも、古えの英国にも思いを馳せる。何事も過去とか現在とかの一つで割り切れるものではなく、さまざまなものが複雑に重なり合う実体の奥を眺めているとも言えよう。単にまったく濁りの無い科学的な眼差しでコヴェントリーを見つめているのではなく、現実と理想、現在と過去、実像と虚像の混じり合う中立地帯を創造してそこに自分を置いている姿こそ、コヴェントリーに見惚れているナサニエル・ホーソーンの実像なのである。視覚で見える世界と、視覚では捉えきれない世界の両方を同時に体験しているのである。この意味で、ナサニエル・ホーソーン文学の基本理念を確認させてくれるホーソーンのコヴェントリー光景でもある。

IV

ナサニエル・ホーソーンは、尖塔の高さが330フィートもあり、先端部は雲で覆われることもあるような高さのSaint Michael's Churchを特に注意深く観察している⁷⁾。ゴシック聖堂で、その魅力を、人間の本性と同じほど深く、豊かであり、まるで生命がある存在のような感じで、自分が全部を知り尽くすことなど到底無理な程の何かがあると纏めている⁸⁾。

キリスト教徒でもないナサニエル・ホーソーンが何故にかくも熱心にゴシック聖堂を見つめるのか。何ら特別な目的もなく出掛けたはずのコヴェ

ントリーではあるが、ゴシック建築物をもとめてあらゆる所を歩き回ったとの文章があるのは何を物語るのか。何ら特別に深い意味などなく、中世建築の粋とも言える建築美に心酔しているだけだと結論づけたくもなるが、ナサニエル・ホーソンの短篇“Sunday at Home”が、その謎を説き明かしてくれる。

その物語の主人公の名前は出てこないが、その性格等の特徴からナサニエル・ホーソンの分身であることは明らかである。その人物は教会のすぐ隣に住んでいるせいか、教会堂の建物に親しみを覚えるようになり、建物そのものが生命を持つようにも見えてくるようになる。しかし、物語の題名が示すように聖なる安息日である日曜日には教会に行かず、自宅にいるのである。自宅でのんびりと安息するのかと思うとそうではなく、日曜日の朝になると、そっとカーテンを引いて教会堂を見つめるのである。やがて、天来の朝日が、尖塔の鋭く尖った屋根にある風見鶏を照らし、それから、屋根、時計の文字盤、窓、正面の入り口、そして、石段まで光が下りてくると、教会堂全体が眩しいほどの輝きに包まれる。そうした様子を秘かに覗いているのである⁹⁾。

教会の存在意義については、日曜日の数時間しか人々が集まらないのに、教会堂は宗教の象徴的建造物として重要であると考え、日々の困難や空しさから離れて一人になり、平安を得る聖なる空間として永久に存続することを願っている。またもの言わぬ壁にさえも宗教的な教えが厳然と存在することと、尖塔が天を仰ぎ続け、教会が安息日の聖なる光に覆われますようにと祈る心さえ書かれている¹⁰⁾。このような作品の内容から、ゴシック建築の大聖堂をながめているホーソンを見るならば、“Sunday at Home”の主人公と同じように、それは建築学的な美というよりは、それによって象徴される、聖なる宗教性のようなものを観ている姿と判断してもよいのではなかろうか。ヨークの大聖堂を三度も訪ねて、畏ろしい程の威厳と香をもたらず、天よりの贈り物であり、その聖なる精神性によって天に舞い戻るかのような気さえすると最高の賛辞を与えていることも納得出来

よう¹¹⁾。

日曜日に身体は家にあるが、心は教会にあると言う主人公と、日曜日に教会に行き、いつもの席につくが、魂は家に忘れる人々の二重の意味が、「日曜日は自宅で」の題名に込められていよう。安息日に心が一緒に教会に行かないキリスト者達の、形骸化する弱さをも見抜いていることは、猫のような目の鋭さを持つホーソン故領けるが、肉体的身体は教会に入らないのも、コヴェントリーでのナサニエル・ホーソンと見事に重なるではないか。一回目の訪問時に、Saint Michael's Churchを崇拜の眼差しで眺めたにもかかわらず、聖堂の内部には入らなかった。“We did not go inside of the church.”¹²⁾と日記にもわざわざ記録してある。なぜ、聖堂の中に入らなかったかの説明は一言の説明もないが、「入らなかった」の一文こそ、“Sunday at Home”の主人公とナサニエル・ホーソンが同じであることを教えてくれる。ところが、2回目の訪問の際には、妻ソファイアと聖堂の内部に入ったのである。これではナサニエル・ホーソンの実像が二つあることになろうが、問題の箇所をよく読むと、内部で、柱などからクロムウエル時代の痕跡が剥ぎとられ、作られた当時の美しさが蘇ったことと、幾つかの遺蹟が平らな墓石と一緒に側廊に添って敷き詰められているようだとの文章しかない。このようなさりげない描写から、あくまでも聖堂の建築美とその美に込められた精神性を眺める延長であると理解できないこともなかろう。このように検討してみると、ゴシック聖堂の聖性に心を寄せる短篇の主人公こそコヴェントリーでのナサニエル・ホーソンであり、また、聖なる領域には軽い気持ちで入り込めないような特殊な感情、あるいは躊躇のようなものを読み取れよう。

V

コヴェントリーで目撃し彼が衝撃を受けたのは、慈善病院で働いている未亡人たちの悲惨な実態であった。彼女等には、それぞれに、一部屋与えられ、その中に暖炉、寝台、椅子等の最低限の家具が備えられてある。そうした環境の中で彼女

たちは、食事を作り、眠り、家庭的な感じを幾分味わうのであるが、一週間の生活費が僅か3ポンド6ペンスであり、仲間の一人が亡くなると葬式費用として2ペンスを無理矢理徴収される。それ故、2ペンスを恵んでくれと人に懇願するのである。このような生活を繰り返しながら、やがて飢え、衰弱して、この世での生を終える羽目になると書かれてある¹³⁾。

ナサニエル・ホーソーンの文学作品には、他者を、ある程度の距離をおいて観察し、何ら人間的な関わりを持たずに生きてしまう人物たちが登場することが多い。このような登場人物たちの特徴は、他者を観察しているうちに何時の間にか、頭脳と心、理性と感性が分離してしまい、非人間的な観察機械と化することである。そうした人間たちは、同じ人間仲間を観察する対象としてのみ見てしまい、そして、結局は、相手をも、自分をも“Outcast of the Universe”にしてしまうのである。

老婦人たちの置かれている状況は、将に、社会から弾きだされている姿である。婦人達が生ける屍と化する悲惨な状況と、そのような状況を作り出す慈善のあり方をも鋭い観察眼で見、問い直しているナサニエル・ホーソーンの姿である。

慈善病院の実態とそれを見つめるナサニエル・ホーソーンの姿も、彼の文学作品で扱われるテーマと重なる。冷酷な観察にのみ没頭する人物とナサニエル・ホーソーンは異なるが、しかし、観察している点では同じである。それ故、観察する人物を否定的に描くのは、観て書く作家故の罪意識あるいは一種の自己批判でもあろうか。コヴェントリーでの姿は、悲惨な実態をありのまま認識する観察であろう。

VI

ナサニエル・ホーソーンがじっくり眺めたものの中に、Saint Mary's Hallもある。中世のギルドによって建てられたこと、大広間、空を表現する天井画、ヘンリー六世と彼の家来たちや、天使、天まで描く織物、歴代の王達の肖像画等に彼は言及している¹⁴⁾。この見学は、一観光客としての体験

であり、ナサニエル・ホーソーンの特質を読み取ることは出来ない。

ナサニエル・ホーソーンは、人間の何気ない細やかな仕草のようなものまで観察して書き残している。Saint Mary's Hallの調理場を覗こうと思って近付くと、そこにいる老婦人はいきなり戸をピシャリと閉めてしまったとか¹⁵⁾、ある学校を見学した時、黒いスーツの老婦人が自分に気づき、視線を向けたが、ただの一言も言わずに去ったなどとの記録もある¹⁶⁾。特に老婦人に関心があるわけではなく、他者とのコミュニケーションを拒絶する人間の心理と行動を見逃さないようである。ホーソーン自身も決して社交的な人間ではなく、他者とのコミュニケーションも上手に出来ない部類の人間である。そういう意味では、老婦人たちの行動に、社会から自己を隔離してしまう自分の悲しい性を重ねあわせて見ているからこそ、敏感に認識し記録として書き残しているのではなかろうか。

コヴェントリー訪問の記録を更に丹念に読むと、文学作品にはほとんど見られない、人間ナサニエル・ホーソーンの一面を知る記録もある。例えば、Saint Mary's Hallにある立派な椅子に、息子のジュリアンと一緒に腰掛けたが、後でその椅子が英国の国王ご夫妻が昔座った椅子と分かったにもかかわらず¹⁷⁾、2回目の訪問ではその椅子に国王ご夫妻の継承者として、妻ソファイアと二人でまた腰をおろしたのである¹⁸⁾。レミントンへ帰る際、間違っただけの方向に行く汽車に乗ってしまい、しかもその汽車の速さがハリケーンのスピードであると書いてあること¹⁹⁾、道路の狭さを説明するのに、両側の家の人が互いに握手できる程であるとか²⁰⁾の言及を眺めるならば、人間ホーソーンのユーモアたっぷりの実像を発見でき、安堵するような感じさえする。

以上、英国体験の一側面に過ぎないコヴェントリー体験を凝視してきたが、ナサニエル・ホーソーン文学並びに人間ホーソーン双方の特徴が詰まっている縮図であると結論づけてもよからう。

最後に、もう一つの重要な兆候を注視したい。英国の長い伝統と歴史に裏打ちされた「古え」に

敬意を表すと同時にその魅惑の虜になっているナサニエル・ホーソーンではあるが、英国社会全体を粉々に破壊尽くさないかぎり古いものを取り除くことは出来ない、と激しい調子で次のようにコヴェントリー日記に書いている。

...and took another look at its bustling old streets, in which there seems to be a good emblem of what England itself really is—with a great deal of antiquity in it, and what is new chiefly a modification of the old. The new things are based and supported on the sturdy old things, and often limited and impeded by them: but this antiquity is so massive that there seems to be no means of getting rid of it, without tearing the whole structure of society to pieces²¹⁾.

(そして、もう一度、賑やかな古い街路を眺めてみた。そうした光景の中に英国の真の姿の象徴が潜んでいるような気がする。つまり、昔からのものがかなりの部分を占めて、新しいものでも大抵は古えからのものを幾分修正したものでしかない。新しいと言ってもそれらは頑丈な古いものに基づき、相も変わらず、過去に支えられているのだ。そうした昔からある古い存在に、新しいものが制約を受け、邪魔されることも少なくない。こうした「古え」はあまりにも巨大な存在で、英国社会全体を粉々に破壊し尽くす以外に、それを取り除くことは不可能なのだ！)

初めての海外生活を2年経験し、肉体的な疲れも多少自覚しているナサニエル・ホーソーンであるが、それ以上に「古え」の魔力的強さに辟易し、拒絶感をともなう一種の絶望感のような心理を読み取れる。英国人のように片目を瞑ってではなく、両目を開いて、英国の深淵を覗きすぎた故の、カルチャーショックとでも言えようか。こうした兆候は、コヴェントリー体験2年後の「100年も横

になり休みたい。」との叫びに繋がり²²⁾、延いては、肉体的衰え、創作力の枯渇へと結びつくものではなかろうか。このようなことを凝視すると、ナサニエル・ホーソーンが忌み嫌う、立ち入ってはいけない「人間の聖域である心の世界」を表に引き出すような恐ろしいことをするような感じもするが、コヴェントリーでの体験と記録の中で注視すべき事実である。ナサニエル・ホーソーンの心をあえて探し求めなくとも、彼自らが、心の深淵を開示してくれる貴重な箇所である。

注

- 1) Herman Melville, "Hawthorne and His Mosses," Agnes Mcneil Donohue ed., *A Casebook on the Hawthorne Question* (New York: Thomas Y Crowell Company, 1969), p.258
- 2) Rayamona E Hull, *Nathaniel Hawthorne The English Experience 1854-1864* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1980), xi
- 3) Randall Stewart ed., *The English Notebooks by Nathaniel Hawthorne* (New York: Russell & Russell, 1962)
- 4) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio State University Press, 1965), XVII, p.4
- 5) *EN*, p.141.
- 6) *CE* V, p 63.
- 7) *EN*, p 138
- 8) *EN*, p 138.
- 9) *CE* IX, p 19
- 10) *EN*, p 26.
- 11) *EN*, p.468.
- 12) *EN*, p.138.
- 13) *EN*, p.579
- 14) *EN*, p.138
- 15) *EN*, p.138.
- 16) *EN*, p 140.
- 17) *EN*, p.139.
- 18) *EN*, p.578.
- 19) *EN*, p.140.
- 20) *EN*, p.136.
- 21) *EN*, p 141
- 22) *CE* XVIII, 6.116